

目次

序

利己が利他となる仕組み／廻向と随喜／上座仏教と精霊祭祀をつなぐ／
上座仏教と精霊祭祀をつなぐ／アッラーによる褒賞／原罪と贖罪と寄進

1

第一章 「解脱」の経済的意味

伊東利勝

19

はじめに

一 仏教実践——エーヤーワディー川流域地方の例 21

「乾燥地帯」の王国／バガンの仏塔群／仏塔を建てる／碑文に残す／先達に敬意をはらう

二 上座仏教の世界観 41

空間と時間の接点／新車の妖怪・幽霊／来世のために／解脱／祖先崇拜のない世界／

前世の因縁

三 実践——功德を為す 57

五戒の遵守と寄進／三衣一鉢／質素な生活／公共事業／物欲から離れる

四 来世を介した格差是正 68

カチンのマナオ／ロンユー／「蕩尽」の定式化

おわりに

第二章 仏典に説かれる功德と廻向のしくみ

藤本 晃 89

はじめに

一 インド文化圏での功德と廻向 91

自分への廻向／功德は物質か／シヴァ教獣主派の例（紀元七世紀）／
ヒンドゥ教のシヌラッタ（祖霊祭）

二 釈尊（原始仏典）に功德と廻向 104

心の因果と物質の因果は別物／行為には必ず結果（業）が生じる／
縁は受けたり受けなかつたり／心と物質は相互に影響し合う

三 「功德を廻向する」とは 114

『シガーラ教誡経（六方礼経）』／増支部経典「ジャーヌツソーニ品」／
小部経典『餓鬼事』に説かれる功德廻向「布施を指定する」／
『餓鬼事』全編の中、釈尊自身の偈は第一、四、五話だけ／
『餓鬼事』から読める功德廻向の法則／
註釈も合わせて、功德廻向のしくみが明らかに

四 釈尊以降の仏教に見られる功德と廻向 132

碑文（紀元前三世紀）／大乘経典（紀元一世紀）／
「無量寿経」には一例だけ、「法華経」にはない／「般若経」／
仏教学界では功德廻向は大乗独自の思想という

五 仏教史から仏教思想へ 143

善行為は三種類（拡張して一〇種類）／釈尊は功德廻向のしくみを明確に説かなかつた
おわりに―功德と廻向は仏教から世界に広がった 152

第三章 人を結ぶ仏教功德と精霊祭祀の「経済」

林 行夫 157

はじめに

一 異なる仏教 159

欲望を断つ／慈悲から生まれた菩薩信仰／上座仏教徒社会／カミガミへの信仰も

二 生の「経済」 167

命の転生／精霊祭祀／供儀の閉鎖性

三 供儀の「経済」 173

最も古い普遍宗教／共同体の象徴的行為／殺生回避としての乞食

四 仏教実践にみる食と功德の「経済」 179

俗人の仏教実践／戒は行うもの／功德を「送る」／功德を「積む」／

人と人を結ぶ／蕩尽／物財の枯渇がもたらす名譽

五 精霊祭祀の現在 190

祈りの合理化／精霊祭祀と仏教の結びつき／学校ではなく自然に学ぶ／積徳の行方

おわりに

第四章 イスラーム社会における喜捨

——中央アジアのカザフスタンを中心に—— 藤本透子

203

はじめに

一 イスラームの教義における喜捨 207

六信五行／ザカートとサダカ

二 喜捨の実践 214

時代と地域による変化／モスタに集められる喜捨／死者儀礼における喜捨

三 喜捨の意味論 234

アッラーから与えられる報酬／来世での永遠の生

おわりに―共生のしくみ

第五章 贖罪と喜捨 ―西洋中世の地平―

佐藤彰一

247

はじめに

一 起源としてのゾロアスター教 250

「枢軸の時代」／鉄器時代の世界システム

二 古代教会の贖罪者観 256

ソゾメノスの証言／オリゲネス、カッシアヌス

三 喜捨の経済的次元 260

取引としての喜捨／アウグスティヌスにおける贖罪と喜捨

四 魂の救済のアポリア 264

魂の彼岸への旅／ペラギウス派異端との戦い

五 時の終わりはいつか 267

線の時間の宗教／アウグスティヌスの時間論／世界年の観念／「時の終わり」の先送り

六 アイルランド修道制の衝撃 273

魂の彼岸への旅と罪障／告解と贖罪の導入

あとがき

意識のなせる業／イスラームの廻向／個の確立／比較の裏返し

執筆者紹介

288

281

